N女のリーダ NPOでプロ 女性活躍の

NPO（民間非営利団体）活動が私たちの地域社会をより良くする契機となって久しい。最近、NPOに従事する女性を「N女」というようになった。命名者は中央大学大学院法学研究科修了の杉原志保さんで、気になるN女の呼び名がNPO活動をさらに活発化させている。

学生記者　土方海緒（文学部3年）

東京・日本橋に近い小伝馬町。駅からすぐ近くの、小学校校舎を改築したというレトロな建物がパッと目を引く。目指す「協働ステーション中央」の事務所は２階にあった。

杉原さんは、支援組織「特定非営利活動法人　ＮＰＯサポートセンター」に勤務し、東京・中央区から事業委託を受けて、社会貢献活動団体間の協働を推進する拠点、「協働ステーション中央」の業務統括責任者である。

介護や子育てなど様々な地域課題解決の実現、より良い地域社会づくりに向けて、中央区の町会・自治会、ＮＰＯ団体、企業、ボランティア団体や同区との間を取り持つコーディネーター団体などに事業組み立てのサポートや助成金などの申請支援を行う。暮らしの中で、あったらいいな、と願うことを実現するため、チャンレンジを続ける毎日だ。

歴女（歴史）やリケジョ（理系）といった造語に続くＮ女は、杉原さんが仕事の打合せ中に生まれた。以来、ＮＰＯ活動がより身近に捉えられるようになった、と評判がいいようだ。

昨年秋には、ずばり、本のタイトルにした『Ｎ女の研究』（中村安希著＝開高健ノンフィクション賞受賞作家、フィルムアート社刊）が出版された。

ＮＰＯに関心を持つようになったのは中大法学部３年から所属した広岡守穂教授の広岡ゼミ。「現場から社会について考える」ことを理念としている。

テーマを考え、現場の当事者にインタビューし、写真を撮影、記事を書く。同教授が発行する雑誌『家庭と暮らし』でも発表した。

一として働き場広げる

OG探訪　杉原志保さん

「私は男女共同参画など女性の問題に関心がありまして、取材で栃木、鹿児島などへ行きました」と杉原さん。取材を通して、地域の人たちが、町と暮らしをより良く変えていく姿を実際に見聞した。住民が地域を変えられると感銘を受けた。

現場には足を運んで初めて学べることがあると知った。「いまの仕事の源泉といっていいでしょうね」と述懐する。

「芽生えと言えるのが」中大大学院を休学中に働き始めた川崎市役所だ。次に勤めたかわさき市民活動センターでは、市民活動団体への助成事業を担当する。相手は200を超える民間団体。助成金を巡って行政と対面する「リアルな現場を見て、衝撃を受けました」

勤め先でベテラン職員からアドバイスを受けた。行政施策もいずれ民間委託の流れになる、大学院での勉強を生かして運営側に回ったらどうか。そして、結婚・出産を経ても関心があることから離れてはいけません、と。

実例をボードを使って説明する

この仕事に至った経緯は実に紆余曲折だった。大学院時代、「思うような論文が書けなくて」悩み苦しみ、果ては退学を決意した。修士論文の提出日。論文ではなく「退学届」を事務室へ差し出すと、受理を拒まれた。〝頑張れ！〟のエールだった。

一計を案じた広岡先生から、男女共同参画の、あるプロジェクトの事業展開から広報まで全てを任された。「先生は口出ししない。1年間、あたふたしながらやりました。そしてスキ

ルや実績のない私がしたことを否定せず、正当な報酬をくれました。これがとても大きかったです。してきたことが仕事になるんだ。先生からは次の仕事もいただきました。仕事にしたいと思いましたね」

後輩を指導し、リアルな研究に

強い決意をもってＮＰＯサポートセンター入りした。一方、「源流」の中大法学部で非常勤講師として後輩を指導する。「現場を知らないと研究はリアルにならない。研究がなかったら日頃の活動に追われ、社会の捉え方が小さくおさまってしまう」

近い将来の、理想的な社会をつくっていく上で、研究も現場体験もどちらが欠けても成り立たないのだという。「学校だけでは〝肌感〟がないんです」

経験豊富な杉原さんに、新たな仕事の依頼があった。東京・府中市がことし７月に新設する「市民活動センター」の開設準備だ。タワーマンションに入り、運営費は億単位。装いも規模も大いに着目される事業展開のアドバイザーとして、Ｎ女は奔走中だ。

ＮＰＯサポートセンターに「Ｎ女プロジェクト」がある。取り組む課題も年代も勤務先も様々なＮ女同士が交流し、課題を横断的に解決していく。その社会貢献活動は社会の賛同や共感を得ている。

マルチな仕事を展開する杉原さん。「やりたいこと」を探り、「好きです」と胸を張って言えるような仕事に就き、「幸せですね」と笑顔を見せる。生き生きとしていて実に魅力的な女性、いやＮ女である。

杉原志保さん（左）と土方海緒さん

「どこで働くか」よりも、「何をしたいのか」を自分に問いかけ、生き生きと働く社会人を目指していきたい。

学生時代の杉原さん

街歩きは現場を踏むこと

中大入学後の杉原さんは、受験勉強から解放されて、仲良し３人と街歩きをした。表参道、渋谷、浅草などへ。「アルバイトをして、みんなでおいしいものを食べて、すごく楽しかった」。街歩きは現場を踏むことだ。「現場から社会を考える」という広岡ゼミの理念をゼミ入りする前から実践していたかのようだ。

ためらいはもったいない

社会貢献活動に励む女性の「働き方」は様々だ。Ｎ女のつながりから波及し、より良い地域社会づくりを目標とする中で、社会貢献への関心はあるものの、プロジェクトを動かすことをためらう人が少なくない。

「私なんて…」「イベントには参加するけれど、運営するのはちょっと…」。杉原さんはこうした現状を「もったいないです」と語る。

ためらう大きな要因であるスキル不足を補い、経験を重ねて自信が出てくれば、Ｎ女として働くという選択肢を持つ女性が増えてくる、と期待を寄せる。

学生記者になりませんか？

『HAKUMON　Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在学生を対象に学生記者を募集しています。

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です！
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

【お申し込み・お問い合わせ】
中央大学広報室『HAKUMON Chuo』　編集担当：久保田茂信　Phone：042-674-2048（直通）　E-mail：hc@tamajs.chuo-u.ac.jp